宮崎汎会員が見た世界の旅第２部人物編第２８話

秦の始皇帝と兵馬俑　中国

１９７２年、田中角栄総理と周恩来首相ががっちり握手をして日中国交正常化がなった。それまで扉を閉ざしベールに包まれていた中国の素顔が少しずつ見えてきた。
中国を初めて訪れたのは１９８７年秋である。社会経済国民会議編成の労使混成の訪中団に加わり胸をときめかしながら二週間にわたって各地を視察した。中国政府は世話役として日本語の達者な二人の青年を付けてくれた。二人とも中国に吹き荒れた文化大革命のときには紅衛兵として北京で活動したなど当時の興味深い実情を問わず語りに話してくれた。一人はその後都内の中国大使館へ一等書記官として赴任してきて旧交を温めた。
西安から車に揺られながら畑の中を走っていると車窓から小高い丘が見えてきた。世話役があの山は中国を最初に統一した秦の始皇帝陵だと告げると、車内の人たちが一斉にカメラのシャッターを切った。
4大文明発祥の地の一つである中国の歴史は古い。群雄割拠する広大な中国を初めて統一したのは今から２２００年前の秦の始皇帝である。秦の都は現在の西安（唐の時代には長安と呼ばれていた）から車で一時間にある咸陽である。

畑の彼方に始皇帝陵が聳え

１９８７年当時の始皇帝陵へ続く道

中国は紀元前４千年頃黄河流域の原始農耕にはじまり、紀元前１５００年ごろには氏族共同体から集落へ、そして都市から統一された国家へと進んでいった。伝説では「夏」王朝が成立したとあるが、確認できた中国最初の王朝は「殷」である。殷の遺跡で発見された甲骨文字はのちの漢字の原型となり、さらに遺跡からは青銅器の祭器や武器が出土している。
中国王朝は殷に始まり周・春秋時代・戦国時代を経て、紀元前２２１年に広大な中国全土を始めて一つに統一したのは秦の国王政で、政は全土を統一した最初の国王即ち始皇帝と称された。始皇帝の生い立ちはいささか複雑である。
始皇帝の父親である子楚（のち荘襄王）は、戦国の習いで人質として秦から隣国である趙の都邯鄲に送られ住んでいた。豪商の呂不韋は趙の人質として今は不遇な子楚の将来を見越し、親身の援助をするとともに一方では、秦の国内で子楚が秦の王となるべく金に糸目をつけず猛烈な運動を展開したのである。ある時子楚は呂不韋の家に招かれ同席した彼の愛人に一目惚れしてしまい妻とした。問題はすでに愛人は呂不韋の子を宿していたのである。生まれた子は政と名付けられた（のち

の始皇帝)。呂不韋は趙と秦の争いの中３人を秦へ無事脱出させる。呂不韋の思惑通り子楚は 33 歳で秦国の国王となる。10 歳になった政は太子として認知された。荘襄王（子楚）はこれまでの呂不韋の数々の恩義に報いるため、彼を丞相（総理大臣）に任命した。荘襄王は権力の座について４年目に亡くなり太子の政が後を継ぎ国王となった。

始皇帝は紀元前 259 年に生まれ、13 歳で秦王となり紀元前２２１年に中国全土の統一を成した。始皇帝は全土に郡県制度を敷き中央統制を強め、またそれまでばらばらであった貨幣や度量衡、道路、文字の統一などを制度として普及させるなど矢継ぎ早の政策を掲げ実行していったのである。一方悪評高い焚書坑儒により思想、言論の統制をおこない、また巨大な宮殿“阿房宮”や自身の陵墓や万里の長城などの大工事をおこなった。秦は多くの思い切った大改革を矢継ぎ早に行い、国民を大工事に従事させるなどしたため、人民の怒り不満が国中に渦巻いていた。

対外的には遊牧民族の匈奴が強大になり中国北方を脅かすようになると、戦国時代の趙や燕の築いた長城を補強し繋げて防壁とした。これが万里の長城である。さらに南方にも進出し現在のベトナムに及ぶ大帝国を成立させた。

始皇帝は生涯幾度も全国行脚を行い自身の目で国情を視察した。5 度目の巡航の時、病を得て紀元前 210 年に亡くなった。秦の政治は途端に混乱し人心は離れ、国は乱れ紀元前 206 年秦朝は項羽や劉邦によってあっけなく滅んでしまい、覇権を握った劉邦が漢の国を興し時代が動いていく。ところで面白いことに始皇帝は不老不死の薬を求めてやまなかったが、徐福は始皇帝に取り入り不老不死の薬を求め続け、ついには日本の和歌山県に逃れたというものである。和歌山県の新宮近くに徐福の神社や墓があるそうだ。

世紀の大発見といわれた兵馬俑は、１９７４年農民が畑の片隅に井戸を掘っていたところ陶片が出てきたところから始まる。当時中国は４人組の騒動で混乱していたが、報告は中央政府まで上がり困難な中ではあったが発掘保存研究が続けられた。これまで兵馬俑坑はどの文献にも記載がなかったが、研究の結果始皇帝を守る軍団として作られたことが判明したのである。１９７６年、兵馬俑を最初に見学した外国の要人は毛沢東の許しを得て訪れたシンガポール首相のリークァンユであるが、以来アメリカのレーガン大統領夫妻はじめ各国の首脳が数多く訪れている。

兵馬俑坑を覆う大鉄傘

私たちに同行している世話役はよく勉強していて何事も訪問地のガイドより詳しいほどであった。西安から車で１時間半、始皇帝陵から１０ｋｍほどで兵馬俑に到着した。

兵馬俑全体を覆う大きな体育館の様な建物に案内された。中は巨大な空間である。

俑とは古代中国の殉死者の代わりに埋葬された人形の事であるが、巨大な空間には柵が設けられ、足下は

身大のいにしえの兵が遥か彼方まで整列している。その数８千体、まことに壮観である。説明を受けながら整列している兵士の顔を見ると一つとして同じ顔がない。いずれも土色一色の素焼きの陶器だが、当時はすべてに彩色が施されていたが掘り出して空気に触れ色彩は変質してしまったようだ。

壮観！傘下には等身大の兵馬俑８千体が並ぶ

足下に迫る兵馬俑

写真撮影は禁止されていたがメンバーから代表して隠し撮りを促され何枚かカメラに収めた。
７年後に再訪した時にはさらに発掘が進み２号館さらに３号館も公開されていた。
別棟にある青銅の銅車馬は発掘時には押しつぶされ原型をとどめず１５００片もの破片で散らばっていたものを丁寧につなぎ合わせ復元して展示してある。見学に訪れる人たちの人気が高く押すな押すなの大盛況のなかやっとこの目で確かめた。銅車馬は２台あり、最初は１９８１年に発掘され、２台目は私たちの訪中した１９８７年に公開されている。４頭立てのがっしりした馬が引く車両は真四角で屋根は真ん丸で開閉できる窓があった。馬はいずれも２分の一の縮尺と説明があった。
当時の武器も展示してあり、矢じりは鋭く鈍色に光り日本の矢じりなる殺傷力の強さを感じさせた。

出土した戦士俑

矢じり

４頭立ての銅車馬

２時間の見学をおえて西安への帰途始皇帝陵の麓まで車を進めたが、駐車場から雨でぬかるんだ泥道が続き陵の頂上まで階段があって登れるが下から眺めるだけで引き返した。参道の両脇にはトタン張りの粗末な土産屋が並んでいた。世話役から粗悪品なので買わない方がいいよと耳打ちされたが、記念にと思い兵馬俑に並んでいる兵士を模した粗雑な土人形を百円で買った。

余談　１９８４年日本に兵馬俑 2 体がやってきて公開された。当時日本一の高層ビルであった池袋サンシャインシティの古代オリエント博物館のオープニングに合わせやってきたものである。サンシャインビルにある総合ビル管理株式会社｛現ＲＳＣ（株)｝が警備にあたった。前年大阪で開催された同展で暴漢による破損事件があったばかりで、友人の同社の幹部社員芳賀敏晴氏は当時凄まじい見物客の訪れを見て、もし破損でもしたら国際問題になるかもしれないと思うと夜も昼も緊張で息を抜けなかったと述懐した。酒豪で豪放磊落な男にそうつぶやかせるとは、警備員はただ立っているばかりと思っていたのに、これは大変だと警備の仕事を改めて認識したのである。